
恋歌THEキャンバス

テイラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋歌THEキャンバス

【Nコード】

N0713F

【作者名】

ティラ

【あらすじ】

本州から少し南にある離島、そこにそびえる有名な進学校。不良のレッテルを貼られていた俺は、ある手続きの末、不良の体には明らかに不釣り合いなその学校に編入することになって……。人生をかなり操作された俺は、超がつくほど個性的な仲間達と、何もかもが新鮮な居候生活とともに、有望人生リスタート！一枚のキャンバスとともに、いろんなものが変わっていく――

序章：あのひとへの手紙

☞ 親愛なる○○へ。

お久しぶりです。お元気ですか。

俺はあれからもずっと元気にやっています。

仕事が忙しくて、なかなか暇が出来ないかもしれないけど、

仕事の合間を縫って、これを読んでもくれると嬉しいです。

俺はこうして真剣に、手紙を書くことなんて初めてだから、

何から書き始めていいか、正直迷ってしまうけど、

最初から、順を追って書いていきたいと思います。

始まりはあの日。

そう、たしかあの日の俺はまだ、バイトのお金で暇な時間を潰すだけの、

代わり映えのない日々を送っていた。

ずっと同じことの繰り返しでいい加減嫌になってきた、そんなとき――

俺宛てに、一通の手紙が届いたんだ……。

『

第一章：小さな場所の、大きな出会い（01）

一抹の重さも感じないポストンバッグを肩に掛けた俺は、空港を降りた後、たまたま近くを通りかかったタクシーを捕まえ、目的の家まで送ってもらうことにした。この島は、数時間もあれば車で一周できるくらい小さな島なので、住所とか大まかな建物の名前を伝えればだいたいは送ってあげられるのだという。

俺はタクシーの後部座席に座り、運転手と他愛ない世間話を交わしながら窓の外に映る見知らぬ風景を眺めていた。島に横たわる境内や大きな敷地を持った豪邸、その他にも気持ちのいいくらいの自然が一面に広がっている。

「ヒコナ島は綺麗でしょう？ 緑に満ち溢れていて、海や川も澄んでるし、自然に溶け込んで暮らすなら絶好の島ですよねぇ」

そんな俺の視線に気付いたのか、それとも世間話もいい加減飽きたのか、いつの間にかこのヒコナ島の美点を褒め称え、それを俺が一方的に相槌を打つという二倍も他愛ない話に変わっていた。運転手さんがしきりに自慢しているところを見ると、よほど島に訪れる観光者（俺は観光者じゃないが）が珍しいのだろうか。

このヒコナ島は本州より少し南にある離島で、一応東京都に属するものの、その様相は東京とは相反するほど自然に溢れた小さな島である。島全体の形は半月型はんげつがたと特徴的で、ちょうど弦の部分に村落

や空港などの人里が横たわっている体系だ。また、聞いた話によると太平洋側に位置する島だというのに冬にはたくさん雪が降り、時には雪下ろしをすることもあるのだとか。

実際、まだ九月だというのに、夏を感じさせるような蒸し暑さはそこにはなかった。むしろ秋真っ只中の涼気が肌に触れ、昼寝をするの……じゃなくて読書するのに最適な気温だと思ったほどだ。読書の秋というやつである。

「ああ、でもね。近々リゾートホテルが建つらしくて……。あくまで噂なんですけどね。ほら、ここって絶好の島じゃないですか。だから観光地としても」

二倍も他愛ない話はまだ続いていた。

さて、何故俺がまだ旅館の一つも構えていないこんな辺鄙な島を訪れたかというと、単純に俺がこの土地に移り住むことになったからだ。細かい説明は追々するとして、先日、俺はこのような手紙を受け取った。

「
特別法廷より御通達
いたします。」

先日、水風結徒様の二条学院高等学校特別編入許可書を、指定校より得られましたこと、此処に傍受させて頂きます。なお、既に入学の手配と移住先の許可は済ませておりますので、お手数ですが9月05日以前に藤林月乃様を訪問するようお願い申し上げます。また、特別編入許可書につきましては、後日、藤林宅にご送達いたし

ますので、その件のほどよろしくお願いいたします。

『

簡単に要約すれば、「ヒコナ島にある二条学院高校に編入する許可が出たから、急いでヒコナ島の藤林月乃ってやつのとこに訪問して、ヒコナ島に移住しろ。細かいことはその月乃ってやつんとこ送っとくから、後は自分で確認しやがれ」といったところだろう。

んなよく出来た悪戯いたずらをどこのマセガキがやったんだと感心したが、実はこれは悪戯でもなんでもなく『国』からの命令なのである。

差出人が『特別法廷』となっているが、特別法廷とは、国会、内閣、裁判所を規程とする三権を超越した実質的最高機関で、法で裁かれないのいいことに、そもそもプライバシーの侵害だの親権剥奪だのと職権濫用紛いなことを次々とやってのける最低最悪の国家機関なのだ。

というのは流石に言い過ぎだが、とにかく法で裁かれることがないので、今回の俺みたく、どういう意図か知らないが勝手に異動させたり移住させたり出来る組織なのだということ。また、『特別法廷こそ真の日本国憲法』と定めてあるので、その意向に対する拒否権は無いということだ。

まあ難しい話になったが、とりあえず「不可抗力でヒコナ島に移住することになった」と考えてくれればいい。実際、俺自身もそう言い聞かせてここに来てるのだから。

そろそろ俺の相槌も限界に達してきたころ、運転手はまるでそれを察したかのように話題を変えた。

「ところでお客さん、ヒコナ島には宿がないから観光つてわけでもなさそうだけど、ここに来たのは大学の研修か何かかい？ それともあれか、リゾートホテル建設の下調べつてやつですかい？」

思いつきり私服の俺が、本当にリゾート開発の構成員だと思うのか？

「そんなんじゃないですよ。俺は……その、不可抗力つてやつですかね。ちよつとわけありで二条学院高校つてここに編入することになって。ここに引越することになったんです」

色々とツツコミたいところはあつたが、とりあえず真面目に答えてやることにした。すると運転手は、驚嘆の声を上げ、確認するよに聞いてきた。

「じゃ、お客さん。高校生ですかい？ いやはやこれは驚きましたよ。村の住人ではないとは思っていましたが、いやゝ遠方からはるばる……」

よく来られましたね、と付け加えて、それからハハハと高らかに笑った。ただでさえ他からの訪問客は珍しいのに、高校生でしかもたった一人で来たなんて稀有^{けう}たる事態なのだろう。俺はふんと鼻を鳴らして、また窓の外に視線を戻した。

そうこう会話を交わしているうちに、やがて流れていく窓外の景色がピタリと止まった。どうやら目的地に着いたらしい。俺は財布

から代金を取り出した。

「到着しましたよ。右手に見えるのが、藤林さんの御宅です」

運転手はのたまい、俺から代金を受け取ると、高らかに礼を言うてくれた。

——多分、もうこのときから始まっていたのだろう。

俺がヒコナ島で切る、新しい人生と、新しい生活が——。

第一章：小さな場所の、大きな出会い（01）（後書き）

『特別法廷』のところ……知つてのとおり、リアルにそんな機関は存在しないので、この物語ならではの設定となるわけですが、うーむ、説明が難しい。

あと、編入って高校以上は在籍校がなければ手続きができないんですたっけ……？そこらへんよくわからないのですが、一応主人公は在籍校がないという設定なので、そこで矛盾点が生じましたら、『特別法廷』の意向ってことにしちゃってください（・・ω・・：

第一章：小さな場所の、大きな出会い（02）

言い忘れていたが、このヒコナ島には住宅街のような、人家が密集しているところはどこにもない。いわゆる過疎地域の民家のありさまだ。だからかもしれないが、都会育ちの俺にはこの一軒から一軒への異様な距離が何とも言えぬ違和感を感じさせる。まあ開放感があるといえばそれまでだが。

さて、俺の目に飛び込んできたのは、明治時代に創られたような純和風木造建築ではなく、たとえば新婚夫婦が新しい生活のために無理を推して建てた新築だった。家のすぐ手前には人工芝で埋められた庭があり、それを取り囲むようにレンガ造りの門が構えられている。外観だけなら、むしろ快適ささえ期待できた。

ずっと突っ立っているわけにもいかないので、とりあえず俺はドアホンを鳴らすことにし、門のすぐ近くまで歩み寄った。が、そのとき、家の庭のほうで何かが動くのを視界の端に捉えたので、俺は伸ばした手を止め、その影に呼びかけることにした。

「ああ、すいません。……えーと、以前」

「はっ、はい」

可愛らしい、まるで幼女のような声だった。それはそそくさと立ち上がり、こちらにやってくる。

門越しでよく見えないのだが、どうやらエプロン？のようなものを首から回しているところを見て、相手は専業主婦か何かだろうか。まあ主婦かどうかは置いといて、人妻である可能性は高い。ああ、何だか嫌だな。

「水尻結徒さんですね？ お待ちしておりました。どうぞ、中へ」

まだ名乗ってもいないのに、女は門を開けて中に迎え入れる。それにしても、えらく丁寧な物言いだな。

「話は月乃さんから聞いてます。ええと、私は愛美と申します。藤^{ふじ}林愛美」

可愛らしい声ながらも腑に落ちない言葉を発したので、俺は訊いてみることにした。

「え？ あんた月乃って人じゃないのか？」

月乃本人じゃないどころか、「さん」付けしてる時点でかなり他人な気もする。

それ以前に藤林って姓は同じなんだから、そんな他人行儀な呼称じゃ本人悲しむような気がする。

言いたいことはたくさんあったが、とりあえず今は相手の返事を聞くことにした。

「いいえ。月乃さんは……えっと、その、私の主人でして」

そうか、よくわかったよ。

俺はそれ以上詮索するのはお肌によろしくないことに気が付き、女——愛美の後について歩いた。まあ歩くと言っても、玄関はすぐそこで、案内してもらうまでもないんだけだな。

それよりも……俺が言うのもなんだがこの愛美って女、かなりメイドが似合うような気がする。というのも、黒絹を梳くしけずったような滑らかで顎のラインに沿ってのびた短髪とか、ドジで気弱ですぐに委縮してしまいそうな眼鏡が似合う純口リ顔とか、そっち路線ではかなりいいセンいってると思うし。この時点で月乃はそっち系だな。

いや、それよりも……俺って今日からこいつらの継子ましろこになるんだよな。……うーん、何かこの小柄で可憐な顔立ちの幼女を見ていると、俺にはとてもそんな実感は沸かない。この際俺が親でもいいぞ？

とか馬鹿みたいな思考を巡らしている間にも、愛美は玄関の扉を開け放ち、中に入るよう催促していた。俺はとりあえず「ありがとう」と一礼し、中に入ろうとした。

——が。

「愛美、二階に必要な道具は全て詰めておいたから。後で取り片付けておいて。あたしはちょっと本を返しに行かなくちゃだめだから」

「あ、はい。承知しました、月乃さん」

というやり取りを聞いて、不覚ながら俺は硬直してしまうのだった。

「あたしは藤林月乃^{ふじばやしつきの}」

今度は俺に向かって言っているようだった。玄関で立ち尽くす俺を見て、とりあえず挨拶だけは、と思ったのだろう。だが、それに対する俺は名乗り返す余裕さえもなかった。

「……？」

よほどアホみたいな顔をしていたのだろう。月乃は額に疑問符を浮かべて俺を見つめていた。俺も月乃と名乗った女をもう一度まじまじと見つめ返し、そして「こいつは女だ」と確信した。

さつき愛美は、たしかにこいつが「主人」だって言ったよな？

おいおい、居候先の一家がレズだなんて聞いてねえぞ。

そんな中、愛美も便乗するように名乗った。

「改めて……私は藤林愛美。不束者^{ふつかももの}ですが、今日からどうぞよろしくお願いしますね」

「はぁ……」

ため息なのか、相槌なのか自分でもよくわからないような返事をし、俺は「幸先が思いやられるな」と落胆してしまうのであった。

第一章：小さな場所の、大きな出会い（02）（後書き）

文体（ていうか調子）はだいたいこんな感じなので、よろしく願
いします。

第一章：小さな場所の、大きな出会い（03）

ベッドに仰向けに横たわり、暗い部屋の天井を見つめながら、俺は今日あった出来事を走馬灯のように思い返していた。

「うーん、なんだかなあ」

なかなか整理がつかないので、唸るようにポツリと呟く。

端的に整頓^{せいとん}するのはやはり難しいので、順を追って説明していくことにしよう。

まず、俺はあのあと愛美^{あゆみ}に案内されて二階へ上がった。俺の部屋の取り片づけと、部屋の案内も兼ねて、とのことだ。当然ながら俺もその後^{つぎ}に続き、ダンボールの山となった俺の部屋の整頓を始めた。ところで月乃^{つきの}はと言うと、彼女は図書館で借りていた本の期限が今日までだ、とかなんとか言って家を飛び出し、しばらく図書館とやらに行ってきたみたいだった。その間も部屋の整頓は続く。

片付けは割りと短時間で終わった。前もってベッドとか机とかは用意していてくれていたらしく、ダンボールの中身を並べたり畳んだりするくらいでそれは済んだのだ。さて、それとほぼ同着に月乃が家に帰ってくる。新しく借りてきた本を右脇に抱えて。

片付けが終わった愛美はそのまま次の仕事へと移る。まあ、こちらへんは主婦がよくする掃除や洗濯物の片付けの類だ。俺も何か手伝えることはないか、と尋ね、適当に仕事を探す。さて月乃はと言うと何食わぬ顔でソファに腰掛け、借りてきたばかりの本に集中し始める。

夕暮れ時、夕飯の支度も皿洗いも殆ど愛美にまかせっきりで、月乃は「あたしには話しかけるな」オーラを全面に放ちながら本に傾倒。俺は皿を運んだり並べたりの手伝いをする。

その後、風呂の……もう言わなくてもわかるよな。

事の一部始終を見直してみると、愛美は奴隷のごとく働き、月乃はそんなことも知らずに自分の世界に没頭しているのだ。一瞬虐待されてるのかとも考えたが、さきほどの言葉と関連付けて考えれば、そんな低レベルな思考に至るはずもなく、また答えも明白だった。

愛美はさつき「月乃は主人だ」と言った。しかしこれは亭主という意味での「主人」ではなく、メイド的立場つまり侍従じじゅうから見ての「ご主人様」という意味だったのだ。ほら、これなら合点がてんがいくし、居候先の一家がレスだとか思わず卒倒してしまうような結論に到達することもあるまい。シャーロックホームズも大仰天……いや、大失笑な推理だけだな（もつともこれを推理と呼んでいいのかは定かではない）

……正直に言おう。実はさつき愛美から真相を聞いたのだ。

まあ平たく言ってしまえば愛美はメイドみたいだな、じゃなくて本当にメイドさんだったということだ。……ああ、メイドというのは語弊ごへいがあるかもしれないな。とにかく、お手伝いさん、使用人、といった職掌しやくしやうだったこと。

ちなみに愛美も俺と同じ立つ瀬の人間で、藤林家に居候している体らしい。まあ俺みたいになんだかんだの事情があつて、学校ごとヒコナ島に移り住んだ、ということだ。これも、さしずめ特別法廷の意向だろうが、そこはあえて聞かないことにしておいた。

また、月乃がそれほど無粋なやつじゃないということもわかった。これも愛美から聞いた話だが、月乃は表に出さないだけで俺が来たことにひどく緊張していたのだ。それは異性がどうかじゃなくて、単純に人間関係に於いて初対面の相手には気を遣ってしまう本能的なものだろう、と言う。だからいつもは分担するはずの家事を愛美にまかせっきりで、自分は本に読み耽って周囲のことを忘れ去ろうとしたのだ。いやあ、なんて変わったやつだろうか。

でも、俺がこれから行く学校は名前から見ても判るとおり、結構エリート坊ちゃま嬢ちゃまが通いそうな私立高校。つーか、通いそうじゃなくて本当に進学校だからエリートが集まってくる学校なのだ。だから、これくらい変なやつ、もとい刺激的な生活ができれば身が持たないというわけである。ああ、レズ疑惑は晴れたとはいえ、やっぱり幸先が思いやられるな。

「ん……眠い」

あれこれ考えていると、既に時計の針は朝の一時を刺していた。今日……昨日は飛行機に乗って、その後レズ疑惑で卒倒しかけたんだ。睡魔が襲い掛かってきても何らおかしくない。

「今日はもう寝るか。明日………今日に備えて」

二条学院高校の始業式ないし俺の入学式は明後日だ。まだまだ時間はあるし、のんびり行けばいい。

疲れ切った俺の身体が、眠りの底に引きずり込まれていくのは、そう時間のかかることでもなかった。

第一章：小さな場所の、大きな出会い（04）

俺がここに来てからこのことを考えるのは三度目になるが、何故藤林家はこの馬の骨とも知らない俺をこつも普通に接待し、歓迎してくれるのだろうか。

聞くとところによると、月乃は俺と同じ年の女子高生で、愛美は俺の一つ年下の女子高生なのだという。こう言ってしまうは悪いが、この世代の女子は赤の他人である男子なんかと同居するのを拒むのが普通じゃないのか。

もっと現実的なことを言えば、たかが高校生の女子一人で、ほぼ同年代の男女一人ずつを養うなんて不可能なんじゃないだろうか。仮にもし俺が逆の立場であつたとしても、無理だと思う。

と、まあこんな感じで、月乃ってどんだけ甲斐性あるんだよ、とか、月乃って実は大富豪だったりするのか、とか、俺の心中で新しい発想が独り歩きしているというわけで。

もしも特別法廷が莫大な資金を月乃に譲渡しているというなら納得してやるがな……むしろそんな甲斐性があるの特別法廷にあるとは思えない。

とりあえずこのことは今度同じ居候の身である愛美に相談してみよう。

• • •

「……さい……ください」

誰かが俺を呼んでいる。穏やかに、だが飽きず、絶えず俺の名前を繰り返していた。

「結徒さん……起きてください！」

「ん……うん」

「結徒さん、朝なんで起きてください。ほら、陽光も抜群ですよ」

それを眠りの狭間で微かに感じ取った俺は、声に呼び寄せられるように瞼を開き、まだ半分眠った声で返事をした。

「愛美さんか。こんな朝っぱらどうかしたのか？」

ふと目覚まし時計に目を遣ると、そこにはくつきり「AM7:00」と刻まれていた。いつもなら寝過ごしてる時間だ。

「愛美『さん』はナシです」

愛美は微笑みながら悪戯っぽく言う。いや、んなことどうでもいいから早く用件を言ってくれ。

「津波でも発生したのか、愛美」

俺は仕方なく訂正してやると、愛美は満足げにふふと笑った。
……この様子じゃ、早起きは三文の得で、すとか調子こいたことぬかしてきそうだな。

「先に言つとくが俺は早起きアレルギーだからな。休日のに早起きすると涙とくしゃみと咳が止まらなくなるんだ。だから今起こせば厄介なことになる。わかつたら二度寝させてくれ」

「えええ……そんなアレルギーがあるなんて知らなかったなあ……
なんて馬鹿なこと言っていないで早く起きてください」

ちつ、本気で騙されたら心行くまでからかってやろうと思ったのに。ダメだな、こいつ。

まあ何にしてもたつた一日でこれだけボケとツツコミが通じるんだからよしとしようか。

俺は朝から身体を揺さぶられるのもいい加減気分が悪くなってきたので、早々に起床を決め込んだ。

藤林家は、一階がダイニングキッチンから続くリビングと愛美の

寝室、廊下から二階へと続く階段、トイレ、洗面所を携えた風呂、玄関。二階が俺の寝室と月乃の寝室、トイレ、後は物置部屋が二つという造だ。

俺は一つ伸びをしながら、愛美に続いてリビングへと向かった。

リビングには、和風一式の朝食を前にして、俺達がやってくるのを待つ月乃の姿があった。テーブルに座って朝食と睨めっこをしている月乃の姿は、それは不器用というかなんというか。

そんなに食いたければ先に食べばいいのに。

「おはよう」

まあ高校生くらいにもなればその意図くらい容易に判ってしまうので、あえて口にはしないが。

とりあえず朝の挨拶を済ませた俺は月乃の前の席に座り、その隣に愛美が座った。

「えっと、その、待たせて悪かったな。あはは……」

愛美に対しては、入学初日に勇気を振り絞って話しかけてみたら偶然意気投合してすぐに仲良くなっちゃった友達くらいに話し合えるのに、月乃に対しては入学して一ヶ月経っても話したことのないくらい距離の感じるクラスメイトのような物言いだ。まあとにかく一つ言えることは、俺がどれだけ動揺しようと、月乃は終始能面でいるということである。

月乃はポーカーなんかやってみると強そうだな。

そんなアホみたいなことを考えていると、愛美が話題を変えるように言った。

「今日はオーソドックスに鮭、味噌汁、ご飯、お漬物の和風一色にしてみました。たとと召し上がってください」

月乃が突然箸を持つて食事を突き始めたことから見て、これが世間で言う「いただきます」なんだということがわかった。まあ朝飯からたとと召し上がれるかどうか疑問だが、この際細かいことは置いといて、俺も素直に頂くことにした（なんたつて安眠妨害までされたんだからな）。

それから俺達は他愛ない話に花を咲かせたが、そこで俺は一つ気付いたことがあった。

それは、月乃の性格のことである。昨日愛美は、「月乃が素っ気無い態度を取るのはひどく緊張しているからだ」と俺に言ったが、実際はそうでなく、これが月乃の本性ではないかということだ。

だって、本当に緊張しているなら、それらしい言動や仕草をとるはずだし、思わぬところで空回りしたり失敗したりもするはずである。たしかに、月乃は終日、本に没頭していたが、夕食とか少なからず俺と接しないといけない場面もあったし、何より俺が玄関で聞いた月乃の言葉なんて迷いや緊迫すらなかったはずなのだ。

何が言いたいかというと、月乃のそれは緊張ではなく、単に無口なだけなんじゃないか、ということである。感情をあまり表に出さない、無口な少女。さっき俺が能面という表現をしたのもそれだからだ。

まあ思い悩んでもまだ出会って一日足らずだ。実はとんでもないお転婆娘でお笑いとを見てゲラゲラ笑う少女かもしれないじゃないか（それはそれで怖いけどな）。とにかくこちらが早合点で空回りしてしまわないように気をつけよう。

「俺さつきさ、愛美が『早起きは三文の得です』とか言ってくれるのかと思った。お前ってずっと敬語だから、なんとなく固い感じがしてな……」

……それ以前に俺が単に人懐っこくて、すぐに馴染んでしまうだけなのかもしれないけどな。

第一章：小さな場所の、大きな出会い（04）（後書き）

既に違和感を感じられている方もいらっしゃるかもしれませんが、この四話まではやたらと説明の多い文章となっています。

連続して説明文を持つてくる手法はあまり好ましくないと心得ていたつもりなのですが、今後のストーリー展開に於いては必須事項だったもので……（汗）

そしてそれに注視するあまり、逆効果になってしまいました。なので、次話は既出の世界観と三名の簡単なプロフィールをさせていただこうと思います。

勿論、ネタバレ要素は一切含みません。また、「別にお前の説明なんかなくても俺はな、十分理解できてるからいいんだよカスが！」って人は飛ばしてくれても結構です（・ω・；）

ではでは、作者よりメッセージでした。

臨時休憩所

前話の後書きにも記させていただきました通り、ここで一旦簡単な世界観の説明を行いたいと思います。

ファンタジー小説によく見られるプロフィールですが、恋愛小説にはあまり無さそうですね。

まあ……異端な作品だな、みたいな目で見守ってやってください。

さて余談もこれくらいにして、手短に書かせて頂こうと思います。

● ● ●

恋歌THEキャンバスは、『特別法廷』の存在以外は、現在の日本と何ら変わらない、純フィクション恋物語。

く 特別法廷

特別法廷とは、日本の三権である国会、内閣、裁判所を超越した国の実質的最高機関。

法律や憲法による拘束を受けないため、仮にも法廷が「死ね」と命

令を出せば当人を殺すことが出来たりする。活動方針については現時点では不明。

水尻結徒に、二条学院高校への入学と、ヒコナ島への移住を指令する手紙を送った。

「特別法廷こそ真の日本国憲法」なので、対象者に拒否権はない。

く二条学院高校

ヒコナ島にある唯一の高等学校にして、私立高校。そして何故か進学校。

エリートが集まると噂されているが、実状は現時点では不明。
月乃、愛美が通う学校でもある。

ヒコナ島自体、過疎地域に類似した状態であるが、在校生徒が何名いるのかは不明。
現時点では謎が多い学校。

くヒコナ島

本州より少し南にある離島。東京都に属する。
島の形は半月型。直線部分に村や空港がある。
太平洋側の気候ではあるが、どういうわけか、日本海側さながらの大雪が冬に起こるといふ。

ヒコナ村や境内、二条学院を構える。

旅館や宿がないので、観光地としては不適切。

くヒコナ村

本文では「村落」と表記があつたが、ヒコナ村のことをいう。

島には市町村のうち、市町がなく、村だけがある状態なので、唯一
人気が集まる場所。

とはいっても家と家の距離感は過疎地域さなからなので、密集して
いるというわけでもない。

みずなぎゆいと 水凧結徒

特別法廷より命を受けてヒコナ島に移住した、在籍校のない十七歳
の青年。

在籍校がないというところから、退学、もしくは中卒か、何らかの
事情があると見える。

案内文より、不良のレッテルを貼られていたが、現時点でその片鱗
はまだ見られていない。

むしろ、夕飯の手伝いや言葉遣いからして、単に交友的ただけで不
良要素がないようにも思える。

愛美とは、部屋の片付けや夕飯の手伝いによって交流を深めたのか、
「愛美」と下の名前で呼べるくらい親しくなっている。

ちなみに「愛美」と呼ぶのは、仮に「藤林」と呼ぶと月乃にも該当

するので却下、また、愛美は結徒の一つ年下なので「愛美さん」というのは不自然だ、という理由からそうなったもの。

愛美には親しく接しているが、月乃に対してはわだかまりがある様子。

本人は「まだ出会って一日足らずだから仕方ない」と思っている。

ふじはやしつきの
藤林月乃

単に無口なのか、それとも緊張しているのかよくわからない少女。

一応、結徒とは同い年。二条学院高校に通っている。

愛美に命令する場面があるが、愛美いわく「普段は分担して家事をする」。

愛美をどういう経緯で居候を許可したのかは不明。

結徒の推測では、裏で特別法廷が動いていると見ている。

結徒と愛美の二人を養っている。

ふじはやしあゆみ
藤林愛美

二条学院高校に通っている。結徒や月乃の一つ年下。

藤林家に居候している

居候なのに何故姓が「藤林」なのかは不明。

家事を一人でこなすところから見て、かなりのしつかり者。
また、常に丁寧語。

……なくてもいいかな？

でも前話で堂々と公言したんだ、男に一言はあるまい。

まあ確認程度に見てくれれば幸いです。

というか見ての通り、まだまだまともらしい恋愛は始まっていません。

二条学院の学園生活もありますし、この物語はおそらくここから始まると言ってもいいでしょう（あ

と、まあこんな大口を叩いておいてまた失態を犯さなければよいですが。

とりあえずここからは説明文を抑えて会話文やそれに伴った地の文を増やそうと思いますので結徒のツッコミにも御注目ください。

それでは……次話で会いましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0713f/>

恋歌THEキャンバス

2010年10月10日04時00分発行